

第32回 東京弁護士会人権賞 受賞

全国音訳ボランティアネットワーク

代表：藤田晶子さん

「音訳」という言葉をご存じでしょうか。音訳は、視覚障がいのある方などにとって、とても重要な情報取得手段です。「全国音訳ボランティアネットワーク」（略称：「音ボラネット」）の皆様は、音訳の普及のために様々な活動をされています。本記事を契機として、音訳と音ボラネットの活動内容に少しでも興味、関心をもっていただけたら幸いです。（聞き手・構成：小峯 健介）



全国音訳ボランティアネットワーク
代表の藤田さん

プロフィール ◆ 2007年6月設立。全国に散在する音訳活動に携わる個人・団体のネットワークを構築し、視覚障害者への支援活動を行っている。従前、音訳活動（必要とする人に声で文字情報を伝える活動）に携わる人たち（音訳者等）と音訳利用者のマッチングはそれぞれの生活圏内というごく狭い範囲の中で行わざるを得なかった。同団体が発足したことにより、音訳者も音訳利用者も、場所的・人的制約から解放され、これまでよりタイムリーで質の高い音訳を、必要とする視覚障害者や音訳者らの所在場所を問わずに提供することを可能とした。また、同団体の設立以前では十分対応することが困難であった専門書・外国図書・まんが等の音訳ニーズへの対応可能性を大きく広げてきた。

——そもそも「音訳」とは、どのようなものでしょうか。

「音訳」というのは、文字情報をすべて音声に変えて録音図書を作ったり、対面朗読の場合は、図書館の対面朗読室で利用者さんが持ち込んだ資料などを読むことです。

よく聞かれるのは、「朗読」と「音訳」の違いですが、「音訳」は、端的に言えば、視覚障害者の目の代わりということなので、書かれていることを足しもせず引きもせず、すべて読む。付随している図だとか表だとか写真だとか絵も、そのときに応じて読みます。

——基本的には全部読むということでしょうか。

そうです。書いてあるものはすべて読むというのが大原則です。だから朗読とは全然違うものです。朗読は自己表現ですが、音訳は読み手の感情はあまり入れない。全然入れないということではないですが、総じてあまり極端な演出はしないということです。

——淡々と読むような感じでしょか。

淡々と読むというのは違います。棒読みでは、それはそれで意味が通じません。

小学生のころ、「、」や「。」で忠実に切って大きな声で読みなさいと教わりますが、音訳の場合はそれでダメなんですね。「、」や「。」にとらわれて読むと文章

が切れているような印象になるんです。「、」なんていうのは、語弊があるかもしれませんが、書き手が勝手に付けている場合が多いので、そこにはあまりこだわらずに、意味の一塊、意味の一括りとしてとらえて読む。耳で聞いて分かる読みをしないとイケないわけです。

——「点字」と「音訳」は、どのように使い分けられているのでしょうか。

点字で読みたいものか、音訳で読みたいものかは、利用者さんの希望により決まります。私たちが選ぶことではありません。

——利用される側はどのように使い分けられているのでしょうか。

生まれたときから目が見えない全盲の方は、小学校からずっと点字を盲学校で習うわけですね。その方たちは自由に点字を読んだり打ったりできますけれども、今は、中高年になって病気や事故で目が見えなくなる中途失明者というのがとても増えています。

その方たちは、中高年になってから点字を習うわけですが、なかなか覚えられない。本当に指の感覚だけで覚える、なぞって読むわけですから、それはなかなか厳しくて、ほとんど点字が使えないです。そうすると音訳だとかテキスト化とかそういうことになるだろうと思います。

——「音ボラネット」の設立経緯を教えてください。

設立の前年の2006年に、取りあえず自分たちと同じ仲間が全国にいるはずだから、「1回一堂に会して悩みだとか喜びだとか何か話し合えたらいいね」という、本当に単純な、「全国にいる音訳者に会いたい」ということが大前提にありまして、音訳ボランティア全国大会というものを開きました。

2年ぐらい前から準備会を用意して全国大会に臨んだんですが、そのときに900人近い申し込みがあって、会場にも入りきれないほどだったんです。

「1回やればいいや」ぐらいの甘い考えで開いたのですけど、そんなことはとても許されない状況でした。それまでも全国津々浦々で活動している音訳グループってたくさんあるのに、横の連携が全然取れていない。情報も行き渡らない部分があるということで、「この際だからネットワークを立ち上げよう」という必然に迫られたところがありますね。

——「音ボラネット」の活動概要を教えてください。

私たちの事務局は東京にあります。飯田橋にある東京ボランティア・市民活動センターというところを無料で貸していただき、そこを事務所代わりにしています。そこで月2回運営委員会を開きながら、会報を出したり、「次に何をやる」ということを決めたりしているわけです。

私たちの場合は、北海道から沖縄までの会員さんを集めたネットワークなので、連合体なんですね。事務局としては、5つのプロジェクトを立ち上げて、全国の会員さんに呼び掛けて、こんなのがあるから手伝ってくださいとか応援してくださいとか、というような形でやっています。5つのプロジェクトの具体的な内容は、私たちのウェブサイトに掲載されておりますので、ご参照ください。

——音訳の難しさについて教えてください。

基本的なことを言えばアクセント。やっぱり関西の人が読むのと東京の人が読むのではアクセントが違います。

それから、下調べの段階で、誤読のないように全部調べるわけですね。特に大変なのは、人名だとか地名。あとは、同音異義語。それと、括弧とかいっぱいありますよね。普通の括弧、カギ括弧、二重カギ括弧とか、

そういうものをどういうふう処理するかとか。

——「かっこ」って読むのでしょうか。

読むときもありますし、ちょっとトーンを落とすとか、ピッチを下げるとか、何かそういう感じで、読みの技術でカバーすることもあります。

——例えば、「？」や「！」は読むのでしょうか。

読まないです。

——決まったルールがあるわけではなく、各音訳者が工夫されていることなのでしょうか。

そうです。年々いろいろなものを読んできて体験しながら、利用者の方からのいろいろな声を聞いたりしながら作っていくという感じですかね。

——音訳者によって個性が出るものなのでしょうか。

それはもちろんです。1冊の本を10人が読んだら10種類の本ができるといわれています。人間性がもろに出てくるものですよ。

基本的に、小説ですと、だいたい1人の人が読みます。

ただ、分厚い行政から来るような何十年計画みたいなものですと、ただ伝える文章ですから、何人かで読んでも個性が表れるということはあまりありません。

だから、何を読むかによって、人数を複数で読むのか1人で読むのかとかいうのも決まってくると思います。

——音訳にあたって心掛けていることを教えてください。

誤読が一番許されない。誤読をすると、見えない人に間違った情報を伝えてしまうことになります。足すも引くもなく、書かれていることを書かれているまま読みます。

——音訳する書籍はどのような基準で選ばれているのでしょうか。

第一条件は、利用者さんの希望、依頼のあったもの。あとは、図書館が選書したものです。

——「この本を音訳してください」という要望があったとき、費用はどうなるのでしょうか。

視覚障害者の方からの依頼は無料です。音訳作業は完全なボランティアです。

最近、「サピエ図書館」ができてきているので、利用者の方がある本を読んで欲しいと要望されたときに、まずは、日本全国で誰かが音訳していないかを調べてみて、全く読まれていないと分かりましたら、音訳することになります。読まれていればそれを借りて読んでいただくことになります。

——音訳の有無がデータベースになっているのでしょうか。

「サピエ図書館」という電子図書館です。インターネットを利用して、24時間いつでもダウンロードが可能になっています。それに続いて、まだまだ遅れていますけれども、国立国会図書館も同じようなサービスを始めています。そういうところを調べて、重複して音訳してしまう労力を減らすために工夫をしています。

——新刊本はまだ音訳されていない可能性が高いのでしょうか。

そうでもありません。「うちが読み始めます」という着手情報は、早いです。着手情報がサピエに上がってくれば、利用者にはそれを待ってもらうことになります。

——「テキスト化」というのは、具体的にはどのような作業なのでしょうか。

合成音声ソフトを使用するとネット上の文字情報を合成音声で読み上げてくれます。ただ、PDFファイルは画像なので、合成音声ソフトが読み取らないんですね。なので、OCRソフトを使用してテキストファイルに変換します。そのテキストファイルになったときに、日本語は複雑なので誤変換がかなりあります。それを校正するのが私たちの仕事です。

——例えば、図表とか写真はどのようにするのでしょうか。

図とか写真とかはまったく読み込まないので、私たちが原稿を作ります。文章化したものをテキストファイルにするわけです。

——「マルチメディアDAISY (デージー)」とは、どういうものなのでしょうか。

もともとは、視覚障害者のためというよりは、「学習障害」、いわゆる「ディスレクシア」の方たちのためのものです。

目や耳とかに障害があるわけではなくて、文字を認識しづらい、書きづらい、時間がかかる、こういう障害をもった子どもさんが今とても注目されている。その子どもたちに教材として何がいいかといったら、マルチメディアDAISYが有効だということが徐々に証明されてきているんです。

マルチメディアDAISYを利用すると、今読んでいるところがハイライトされます。

伊藤忠記念財団が子ども向けの良書をマルチメディアDAISYにして、特別支援学校や図書館に寄贈しているのですけれども、その音源を私たちが提供しています。

——技術の進歩によって、今後、音訳にどのような変化が生じるとお考えでしょうか。

今、音訳界の最大の悩みは、音訳者の高齢化。高齢者の読みの欠点は、声が枯れてくるとか、声が低くなるとか、口の中にぺちゃぺちゃという口中音が出てくることです。

今のご時世ですので、自前で録音器材（パソコンや各種ソフトなど）を買い揃え、無償のボランティアをするというのは敬遠されがちです。なかなか若い人が集まってきません。1人の音訳者を育てるのは時間もかかり難しく、音訳者の高齢化が最大の悩みになっています。

これは日本ライトハウスというところがやっているのですが、教科書の本文は合成音声に読ませて、図や表が出てきたときは人間が原稿を書いて人間が読んで、それを合体させて1冊の教科書にするようなことも進められてきています。

人間と機械のコラボみたいなものが、これからもっともっと増えていくんじゃないかなと思いますね。

——合成音声の発展は歓迎すべき事態ということでしょうか。

歓迎すべきかどうか分かりません。ただ、利用者さんにしてみれば、そういう合成音声、機械音で聞くのは絶対嫌だって方はいますね。目が見えない上に、常に

耳を酷使しているので合成音声を聞いて耳が聞こえなくなるという例もあるんです。

—— 合成音声は、聞き続けている方にとっては辛いものなのですね。

そうです。でも、ソフトは日進月歩で進化しているので、これからはもっと滑らかになってくると思うのですが、肉声にかなうものはないはずです。ましてや、子どもたちに正しい、美しい日本語を伝えていくには、やっぱり、肉声しかないだろうと思います。合成音声もあり、肉声もありというふうにやっていかないと、全部合成音声というわけにはいかないだろうと思うんです。

うまく棲み分けというか、いろいろな選択肢が広がっていくことが最大のメリットだと思います。

—— これまでの活動を通じての苦勞を教えてください。

例えば、文芸書について言えば、いろいろな形のものが出てきています。黒田夏子さんが芥川賞をとられた『abさんご』は、横書きで、平仮名で書かれたり、文の区切りだとか行替えだとかが独特なんです。

そういうように配置が独特だったり、漢字で書くべきところを平仮名で書いてあったりとか、難解なものが出てきて、それを音訳で読んでも、音訳を聞いた視覚障害者の方は、耳で聞いただけでは何がいいのかよく分からない。ところが、テキスト化してもらったら、よく分かりましたって。テキスト化をすると、漢字だとか分かるので、テキスト化の方がいい。

オーソドックスな文芸書だけでなく、本当に音訳者泣かせのようなものが出てきているのかなと思うと、今まで以上に難しい時代になっていると思いますね。

—— やりがいはどのようなものでしょうか。

私たちが音訳をしているのは、成人の不特定多数の人に向けたものがほとんどです。児童書や絵本はほとんど読まない。だから、自分のものがどんなふうに読まれて、誰がどんなふうに聞いているのかなんてなかなか分からないんです。

それが、たとえば、ICUを受験したい子が必要としているというように、相手がある程度特定できるようになるとすごくモチベーションが上がるんですね。「あり

がとう」と言ってくれる。利用者さんからのフィードバックがあるとすごくうれしいし、やりがいにつながります。

どんな苦勞をしても「ありがとう」と言ってもらえれば、今までの苦勞は消えちゃいます。もう二度とやりたくないなと思っていても、また1カ月ぐらいしたらまた読んでみたいと思う。うちの会員はみんなそんな感じです。

—— 音訳やテキスト化にあたっての法律上の課題について教えてください。

著作権法37条3項です。マラケシュ条約の批准に向けた動きがあります。

点字図書館も公共図書館も37条3項で複製は自由なわけです。けれども、地域のボランティアは著作権者の許諾を取らないとできない。現在は、文化庁長官の指定を受ければOKということになっていますが、1年がかりぐらいメールのやりとりをして、「いや、ここはこうです」、「ああです」なんて言われてやらないとなかなか認可が下りない。

今回、マラケシュ条約に関連して著作権法が改正されれば、もっと緩くなるだろうといわれていますので期待しています。

—— 国や行政に対して求めることを教えてください。

もっと弱者に優しい政治をしていただきたいですね。これからますます高齢化社会になって、視覚障害者でなくても本が読みづらい人がずっと増えるわけですから。

—— 今後の課題について教えてください。

音訳を利用してくださっている方は、視覚障害者のうちの本当に一部なんですよね。音訳活動をもっともっと広めなくちゃいけない。身近にこういうグループがいるよということも広報していかなくちゃいけない。もっともっと知ってほしいと思いますね。

—— 読者に向けて何かメッセージはありますか。

いろいろなことに興味を持っていただき、障害者にも優しい弁護士さんたちが増えてくださるとうれしいですね。